■肢体不自由のある子どもたち・知的障害のある子どもたちへの実践事例

肢・知併置校におけるマルチメディアDAISY図書の活用方法

東京都立鹿本学園
本多　桂子

はじめに

東京都立鹿本学園は、肢体不自由教育部門（小・中・高）と知的障害教育部門（小・中）、２部門５学部で構成される特別支援学校です。児童・生徒数は肢体不自由教育部門172名、知的障害教育部門285名、合計457名（2021年５月１日現在）と東京都内の特別支援学校で一番多くの児童・生徒が在籍している大規模校です。

本校は2014年の開校から、読書活動の推進を学校経営計画で示し、読書環境の整備や読書週間など児童・生徒の意欲を高める取り組みを、全校一丸となって実践しています。中でもマルチメディアDAISY図書は、本校の読書活動の一端を担っており、言語能力の向上を目指した授業実践を展開する際の大きな力になっています。

本校の特色

本校は「人々と協調し豊かにたくましく生き抜くことができる確かな学力と自信を身に付けさせ、共生社会をつくる人材の育成」を目標にしています。障害の程度・状態にかかわらず、言語の表現手段や文章表現の習得及び思考力・判断力を伸長させるため、前読書期の初期段階の指導から多読期・成熟読書期に至る段階的な指導を行うと共に、読書環境の整備やICT機器を活用した読書活動の拡大を図っています。

今年度の実践

今年度の学校図書館は新型コロナウィルス感染症の予防のため、何度か閉館期間を設けざるを得ませんでした。2021年10月には本格的に開館し、時間や人数制限などの「密」を避け読書活動を展開することができました。また、自由な貸出が困難なことから、昨年度から「校内貸出パック」と称し、２週間20冊をまとめて学級へ貸出支援を行っています。感染防止のため、閉館期間中は本が大好きな子どもたちにとって学校図書館へ行き、自分で借りることが困難な状況は残念ではありますが、iPadを使用したオンラインでの本選びなど工夫しながら、本に親しむ姿もありました。

マルチメディアDAISY図書について

は、以前は教室環境（大型モニターやパソコンの台数制限）や担任の負担という課題がありましたが、コロナ禍によるネットワーク化が進み、全教室に大型モニターの設置、それぞれの子どもたちにiPadが１台ずつ届くなどハード面での改善により、使用しやすい環境づくりが進んでいます。そのため学習へ積極的に取り入れていく教員が増えています。

具体的には、毎年４月当初には全校への普及と啓発のために、教職員へマルチメディアDAISY図書の使用方法の説明や、作品リストの提供を行い、発達年齢に応じた作品内容の選び方の助言を行う機会を設けています。この機会で良さを知って自分でネットワーク上にある作品を、使用方法のマニュアルを見ながら授業に活用できるよう工夫しています。これに加えて伊藤忠記念財団より寄贈いただいたiPadを利用し、大型モニターでの集団視聴とiPadでの個別視聴を行うことで、両方の良さを生かして実践しています。

今年度は、肢体不自由教育部門および知的障害教育部門の各部門１名ずつ計５名の司書教諭が集団、個別でマルチメディアDAISY図書を使用する実践をしたことを検証していきます。マルチメディアDAISY図書の使い方にはさまざまあり、子どもたちの実態に合わせて、ねらいや課題を設定して実施しています。本校は東京都立特別支援学校の中でも読書活動を活発に取り入れて授業展開していることから、子どもたちの読書への興味・関心が高く、マルチメディアDAISY図書をどのように活用し広めていくかが課題となっています。図書担当で検証し、本校に合わせたスタイルで展開していきたいと考え報告いたします。

〈 集団使用での効果 〉

認識レベル	１歳～５歳程度の言語能力。肢体不自由部門では手指の操作性はむずかしい。
使用作品名	『三びきのやぎのがらがらどん』 『ノンタンシリーズ』 『あたらしい関西のでんしゃずかん』 『おとうさんはウルトラマン』 『おおきなかぶ』 『コッケモーモー』　など
ねらい	集中して話を見聞きする。 絵本の絵を見たり、言葉を聞いたりして読み聞かせに興味をもつ。
授業展開	「国語・算数」の読み聞かせと読解 （１回の授業で５分～20分）
子どもたちの様子	集中して見聞きする。 絵本を選択ができた。 自分の見たい絵本の題名を必死に探す児童もいた。 聴覚優位の場合は繰り返しの言葉、声色の変化や鳴き声のオノマトペの表現に興味を示した。

教師の感想	抑揚のある読み上げ音声が関心をひく。 「読み聞かせ」の選択肢の一つとなった。スイッチ等で動かせたら、生徒の可能性が広がる。（能動的）

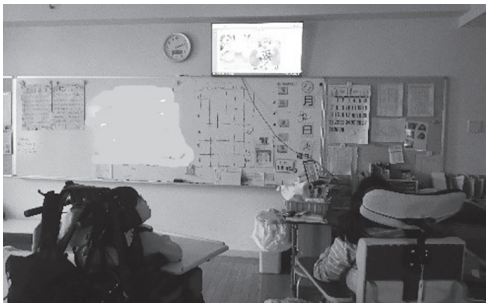
集団での使用では国語の授業で読み聞かせや簡単な質問などに使用していることが多く、友達同士での交流を有効に使いながら展開していくと効果的でした。本校は学級数も多く、小さな集団での読み聞かせ、国語の授業での内容の理解などに使用することが有効であると感じました。

〈 個別で使用した効果 〉

認識レベル	知的障害　小１くらいの認知。
使用作品名	『新・東京のでんしゃずかん』 『あいうえおにぎり』 『たくはいびーん』 『ヤダヤダかめん』
ねらい	好きなものを友達に紹介する。文字の学習、コミュニケーションツールとしてのiPadの活用、発声、発語の練習、内容の理解（気持ちの変化など）
授業展開	給食前の時間に実施。パソコンで見る。 「社会性の学習」の時間に個別課題学習で使用。iPad操作、ハイライト機能での文字入力。いくつかの文字に関しては発声・発語練習。 国語の読解。パソコン操作、文字入力など。
子どもたちの様子	乗り物の作品は喜んで見ていた。電車の名前を正確に言うこともあった。友達に説明しながら楽しむ様子があった。 矢印キー（↑↓←→）を使ったパソコンの操作を覚え、自分で課題を進めることができた。文字や言葉に対する理解、パソコンやiPadの操作に関する理解が進んできている。あわせて発声・発語の練習も取り組むことができた。 内容の理解や登場人物の気もちの変化を文字入力によりまとめることができた。
教師の感想	給食前に一度気持ちを落ち着かせる時間にもなり、その後の給食は落ち着いて食べることができている。 矢印キー（↑↓←→）で操作ができ、生徒が自分で課題を進めることができた。多くの作品があり、ねらいや実態に合わせたものを選ぶことができた。 ハイライト機能が有効で、文字の意識が効果的であった。パソコン操作、文字入力にも役に立った。

個別に使用することで、iPadの操作や音読、発声、文字の学習など、より詳細に学習展開ができます。よって肢体不自由教育部門では個別での指導に取り組みやすいのではと思います。その反面、知的教育部門では集団での学

習が中心のため、個別での使用には支援体制・方法などの課題もあります。なお家庭で使用する場合は個別学習に近い環境のため、肢体不自由教育部門・知的障害教育部門ともに取り組みやすいと言えます。学習効果を挙げるためには教員が使用方法を指導して繰り返し使用し、各家庭とも連携しながら進めていくとさらに良いのではと考えます。



肢体不自由教育部門

おわりに

本校は今後のマルチメディアDAISY図書の効果的な活用を考えていくうえで、紙媒体と連携させた意識的な取り組みと、教員への有効性のある作品紹介が重要な鍵になっています。

新型コロナウイルス感染症拡大に伴うさまざまな対応が今後も迫られる可能性があることから、本校は先進的にICTの充実を図り、オンラインでの授業も積極的に取り入れています。読書活動も紙媒体と電子図書の両方を障害のある子どもたちの発達段階・障害の実態に合わせて選択し、授業へ取り入れていくことで、より効果的に活用できることと思います。

これからも、マルチメディアDAISY図書の機能や操作性などがより充実していくことを期待しています。